

# 分散会 1 1

司 会 者 原田 幸夫  
記 録 者 二宮 啓  
会場責任者 大森 茂樹

## 宮崎県 南日本ハム株式会社

人が未来をつくるのであれば、人を創る食への教育は、子どもだけでなく老若男女を問わず、どの世代にも重要だと考えます。

弊社は 2012 年から日向市教育委員会の要請を受けて「企業等による出前授業」事業に参加し、2013 年に宮崎県教育委員会のアシスト事業に登録し、学校・家庭・地域を対象に活動を行っています。教育行政のコーディネートシステムを活用することで、産官学による価値創造が生まれ、社会課題を効果的に解決する可能性が広がっています。



難波 裕扶子 氏

## 自主防災活動を続ける主婦 2 人

愛南町教育委員会が企画した「保護者を東北の被害地に～東日本大震災復興支援事業～現地研修並びに東北を元気にする夏井いつき防災句会クラブの実践」に私たちは参加しました。

仙台市近郊・閑上中学校遺族会会長の丹野さんからお話を聞き、心が震えた私たちは、福浦地区に帰って私たちにでもできることを少しずつ実践していこうと決めました。

細かく分かれた全ての地区へ入り込み自主防災訓練を重ねてきました。防災学習会も定期的に行っています。私たちの命は私たちが守る。少しずつ、でも確実に地域の方々の意識が高まっていくことが本当にうれしいです。



松田 恵子 氏 菅原 りえ 氏

## ボーイスカウト愛媛県連盟新居浜第2団

「生きぬく」をテーマに平成 29 年 8 月 11 日から 8 月 16 日の 5 泊 6 日、新居浜市の別子山にてボーイスカウト新居浜地区キャンポリーを開催しました。

活動期間中に子どもたちが取り組んだ自治運営や成人の関わり方、そして活動を通して改めて感じた現代社会を「生きぬく」について発表します。



柴田 和浩 氏 中村 元氣 氏 吉川 直希 氏

質疑応答、感想

## 宮崎県 南日本ハム株式会社

Q 最初に比べ、学校の評価はどのように変化していったか？

→終わった後に、「これがキャリア教育なのですね。」と言われ、それ以降、毎年来校するようになっている。それから広がり、地域の学校から約5校よんでもらうようになり、教育委員会もより活動を進めていってもらえるようになった。

Q 行政の補助はどのようになっているか？

→補助はない。私たちはお金が欲しいのではなく、皆様にお伝えする場がほしい。「キャリア教育アワード」は0予算で行った。それには、知恵と人脈が必要であり、そのためには、信念を信頼に変えていかなければならない。

Q 中学校で職場体験があるが、最初の段階で企業と学校側の壁はあったか？

→教育現場と企業現場では文化が違う。学校では引き継ぎが上手にされていないことがあり、今後、マネージメントの仕方を考えなければならない。「社会は複雑であり複雑がものすごく絡み合っている。だから、一つの解決策がいろいろな物の解決策になる可能性が高い。だから諦めてはいけない。」という話を聞いたが、私もそう思う。

Q 食育の根底で一番大切なことは何か？

→好き嫌いを許すことで、食に対して感受性が低くなり、感性が鈍くなり、無関心な子どもが増えてきている。楽しく食べることに目を向けさせたい。そのために、保護者にアプローチをしたいが、本当に来てほしい人は来てくれない。伝えたい人に伝えることができない。親へのアプローチが必要だと思う。

Q 「選ばれる会社になる」とあった。人から選ばれるコツは何か？

→資料にある『「三方よし」を基準とした「みんなよし」の社会』である。そのために絶え間ない努力が必要で、課題を対話していくことでできあがっていく。難しいこともあるが、可能性を決めるのは自分であり、限界を決めなければできてる。

○ 大洲市で、「読書」「食育」を推進するようにと言われた。「食」に対する活動で学校と保護者の間に立つのは公民館であると感じた。

## 自主防災活動を続ける主婦2人

Q 住民の意識を変えるための工夫はあるか？

→頼りにすること。「私たちが知らないことを教えてもらわないといけないのよ、そのために元気おってよ。」と伝えることである。「子どもたちのためにお願いします。」子どもたちのために自分たちが役に立っていることを実感させる。

Q 女性視点での避難所の工夫はあるか？避難所として小学校の取組は、どのようにしているか？

→小学校は海拔が低いので無くなってしまう。なので、高台に防災所を4箇所設置している。避難訓練をして、本当に必要な場所を話し合っって設置している。避難場所には、民家があるので「避難場所になるという意識をもってください。」と伝えている。

Q 要介護者への対応はどのようにしているか？

→避難訓練でみんなが考えようと意識が変わってきている。小学校の子どもたちが一人一人の顔を覚えるという意味も踏まえて、全戸に様々なチラシを配っている。

- お年寄りの方に社会的存在価値をもたせること、そのために、子どもたちが支援者となること、風土を創ることが大切であると思った。訓練が普段から必要だと思った。
- 実家が盆地なので、土砂崩れや災害があると思うが、どのようにしたらいいのか考えられる機会になった。
- 地域ごとに自主防災組織があるが、行政の人たちも災害の被害者になるのだから、自分たちで何とかしようと自主性を育てていかなければいけない。
- 防災マップがあるが、保護者次第で見ていない家庭が多い。地域性で意識が違う。

Q 受け継がれる経験で、大変だったことを教えてほしい。

→排泄が困った。普段は3食だが、食べることができずエネルギーを消費しないようになる。少しずつ食べると体の負担にもならないようになる。

- 福浦小学校区のある中学校の校長である。避難訓練のパンフレットは、全戸に持って行くことでお年寄りの顔を覚えることができる。訓練に直接参加できなくても「OKカード」を玄関に貼ってもらうことで、協力してもらう。東北で様々な話を聞いたが、防災教育は風化させてはいけない。学び続け、伝え続けていかなければいけない。

## ボーイスカウト愛媛県連盟新居浜第2団

Q 企業側からの視点からして感銘を受けた。参加させる保護者の考えや意識が変わったこと、なぜ参加させるのかななどを教えてほしい。

→保護者たちに説明会を行い、子どもの背中を押してほしいと伝える。そこでは、趣旨を説明し、「私たちは、来てくれたら子どもたちは変わる、行かせてよかったと思える、保護者も満足することができる。」そのようなプログラムを組んだと伝えている。

Q 子どもが帰りたくなったときの見守り、促し方はどのようにしているか？

→年齢の近い子に聞いてもらう。最終的には残れるようにしている。話を聞くことで気が楽になると思う。しかし、体調面で仕方のない子はどうすることもできない。

Q 隊長をやっていてよかったと思うときは、どんなときか？

→子どもがうれしい顔をしているときである。保護者や兄弟に話を聞いたときにステップアップしてとぼうとした瞬間、とんだときの瞬間を見たときである。

Q 指導者は研修をされているのか？

→指導者の研修はあるが、自分が現場で工夫して生かしていく。そして、他の指導者とも基本方針は確認し、反省会も行っている。

- 実践交流集会の名誉顧問の讃岐先生が今の子どもたちに欠けていることとして「か…過失、き…危険体験、く…苦労、け…決断力、こ…貢献」を言われる。そのためにも、キャンプなどの体験活動を取り入れていくことは大変有効であると思う。子どものニーズだけでなく、指導者のニーズを工夫してプログラムに取り入れることも大切だと思う。

# 分散会 12

司会者 中山 佑司  
記録者 幸島 恭輔  
会場責任者 本田 精志

## NPO法人全国生涯まちづくり協会(コーディネータ及び推進研究会)

### 明るい家庭づくり実践講座 (PTA教育講演会)

駅舎を中心に活動している自治体と協力して「官民一体」のイベントを行っている。熊本、大分の復興のためにチャリティーイベントを行った。東北の震災の際にも、キャンドルを用意して地元の高校生にボランティアを募ってキャンドルナイトを2年間行った。このチャリティーイベントでは、駅舎の構内に抹茶席を設け、作法を学んだ高校生たちがお茶を振る舞う。イベントの案内や誘導なども高校生が行っており、この活動が約10年間続いている。このイベントに参加した高校生は卒業後も一般参加として社会奉仕のために参加してくれている。イベントには留学生も参加し、語学交流をする機会にもなっており、学校現場では実施しにくい対外的な活動を運営することで、今後、社会奉仕として地域で活躍してもらおうきっかけになればよいと思っている。



沢環氏

### 無人島チャレンジ実行委員会

#### 御五神島・無人島体験事業

「御五神島・無人島体験事業」は、今年で30回目を迎えた。今年度は県内48名の小中学生が参加し、無人島での生活を体験した。今年台風の影響で予定より早い離島になってしまったが、シュノーケルや釣りなど、全身で自然と関わった。無人島では、三不(不足・不便・不自由)の制約された生活をする中で、子どもたちは自ら創意工夫し、協力し合いながら自然体験活動・生活体験活動に取り組み、自立心・社会性・精神力を向上させた。子どもたちの感想からは、物の大きさ、友達や家族の大切さ、これまでの生活のありがたさを実感したことがうかがえた。



須山 華鈴氏 松本 拓海氏  
竹本 啓貴氏 工藤 壮樹氏  
今村 友萌氏

### NPO法人えひめ人材ブリッジ

#### 誰がやる？私でしょ〜♪

NPO法人として、松山市全体の子どもの視野に入れて子どもキッチン、ドイツボードの展開、ブックスタート、読み聞かせ、イベントの補助などを行い、地域行事や校区行事、学校行事に関わっている。いかに仕掛け、巻き込み、続けるかを考え、大人が「やってあげる」行事でなく、準備から運営、片付けまで子どもにさせる行事を進めること



中田 千種氏

で、子どもの主体性を育てている。子供会への加入率への低下や子どもの数の減少、世代間のギャップなど、問題を解決するために、地域の特性や地域性を大切にしながらわかりやすい、見える化を進め、持続できる活動を展開している。

### 質疑応答

#### NPO法人全国生涯まちづくり協会(コーディネータ及び推進研究会)

Q1. 高校生ボランティアを集めたり、事前指導をしたりする上での工夫は？

→会長が学校長に直接交渉に行く。高校生の学びに合わせて、農業高校、商業高校などにボランティアを募っている。参加して協力してくれた高校生を一番大切にしている。ボランティアの高校生にこそスポットライトを当てていきたい。

#### 無人島チャレンジ実行委員会

Q1. 安全管理、精神面での工夫は？

→学校の教諭や養護教諭、看護師が帯同体調管理をしている。イノシシが出没することがあるので電気柵を張って、夜間イノシシ番をしている。草刈りをしたり、事前に現地調査をしたりすることで安全を確保している。

Q2. 班の構成の仕方や、構成で留意していることは？

→当日初めて会うメンバーなので初めは緊張しているが、10日間の関わりの中で班が家族のように関わり合うようになる。

Q3. 水はどうしているのか。

→飲み水はポリタンクを船で運んできて使っている。食器は海水で洗って天日干ししている。

Q4. 協賛は誰がお願いしているのか？

→事務局がお願いして協賛をいただいている。

#### NPO法人えひめ人材ブリッジ

Q1. どれくらいの子どもが参加しているのか。

→1000世帯3000人が地域にいて、100人弱の子どもがいる。

Q2. どういうふうの子どもを集めているのか。

→地域の子どもだから歩いて来られる。公民館や学校も無料で使える。使えるものを最大限に使って子どもの参加を促している。

Q3. NPOと公民館との関係は

→何かを頼って連携したりすることは基本的にはないが、個人的に頼りにしている部分もある。NPOとして独自に活動している部分が多い。

### 分散会参加者の感想

○ 同じようなことをしていてもやり方が違っていて、新鮮だった。子どもたちを巻き込むことで子どもの力になることを知ることができて勉強になった。

- なにがきっかけで活動を始めたのかが気になった。また後でじっくり話を伺いたい。
- 大学生の成長を感じた。
- どの団体も持続可能な活動が展開できるためにいろいろな工夫がなされていることが分かり、勉強になった。
- 今回のような学びを生かして、発信できるようにこれからもがんばりたい。
- たくさんの実践が聞けてよかった。たくさん吸収するものがあった。
- 新しい考え方を知ることができた。これからの大学生活をがんばっていきたい。
- 大先輩のすてきな話を聞けてうれしかった。自分の子どもと同じ年齢の大学生たちががんばる姿を見て励みになった。子供どもたちを巻き込んだ活動をこれからもがんばっていきたい。
- 自分たちの活動でも継続することが課題となっている。巻き込むことなど、今日教えてもらったヒントを基に、活動を続けていきたい。
- 巻き込んでいくことも大事だし、それよりも自分が楽しめる活動をしていくことが大事だと思った。
- 挑戦をし続ける事業が残っていく。リスクがあっても目標に向かって、軸がぶれることなく続けていくことの大切さを学んだ。
- 無人島事業に参加したことがきっかけで、今日は貴重な話が聞けた。子どもたちのために尽力されている活動に心がほっこりした。
- 自分が子供のときの体験を思い出した。
- 大学生がすばらしい活動をしている。その背景にある大人のがんばり、30年間のがんばりをもっと知りたくなった。NPOがここまでやらないといけない社会になっていることに驚いた。
- それぞれの立場で、今回学んだことを生かしていくことが大事。学校教育で学んだことを社会教育でいくことが大切。



# 分散会 13

司会者 畷崎 優和

記録者 岡本 和也

会場責任者 遠藤 敏朗

## 広島県 NPO おのみち寺子屋

### 第 15 回人間力育成塾

8月上旬に小学4～6年生を対象に、「おの100挑戦隊～感動創造の旅～」と称して5日間で100km完歩を目標とし、感動創造の旅を行っている。限界への挑戦や非日常の体験の機会を得ながら、尾道の郷土を感じられるコースを歩く。青年会議所の活動としてスタートしたが、第6回からはおのみち寺子屋が主催している。長年の活動により、地域の風物詩としても認知されてきている。

15年の歴史の中で小学生時代に完歩した子どもが支える側として協力する人が増えてきている。多世代でのつながりができ始めている。地元尾道への愛着。おの100で完結するのではなく、豊かな社会が築けるようにしていきたい。



木曾 祐介氏 廣瀬 麻理氏

## 伊予校区愛護班連絡協議会

地域で子どもを育てる（「南いよミニキッズニア」の取組を通して）

さまざまな職業を体験する「南伊予キッズニア」を開催した。伊予小学校区内小学生431名のうち約100名参加した。友人経由で14企業・団体に協力してもらった。カメラマン、保育所、福祉、自衛隊など分野も多岐にわたる。例えば、設計士の体験では子どもが描いた絵を図面にしてプレゼントをしたり、カメラマンの体験では子どもが保護者を撮影したりした。子どもたちは日常では味わえないさまざまなことを経験することができた。

これからの子どもに対して「選択肢を増やす」「本物を見せる、体験させる」「理不尽さを体験させる」「大人の役割（一緒に汗かいて一緒に苦労する）姿を見せる」などのことを伝えていきたい。そのためにも対象を小学生だけでなく、幼児や中学生などに対象を広げていきたい。



河内 勇人氏

## 松山市生石地区まちづくり協議会教育文化部

次の世代へ夢をつなぐまちづくり～垣生山での里山教育～

垣生山は、防災機能の役割を果たし健康保養と文化兼ね備え生石地区のシンボルである。ベンチの作成や桜の苗木植樹などをして地元住民に活用してもらえるようにしている。災害時の避難道になることなども考えて登山道の整備も行っている。垣生山を防災面でも役立てていきたい。

2016年8月11日に第1回目の「垣生山に登ろう会」を開催した。地元住民が約50名参加した。今後は春夏秋冬、各季節4回実施できるようにしたい。そして、この垣生山を活用して昆虫採集や生活と結びつけた防災訓練などの里山教育を展開していく。今後も垣生山中心にまちづくりをしていきたい。



替地 和人氏

## 質疑応答

広島県 NPO おのみち寺子屋「第 15 回人間力育成塾」

- Q 5 日間で 100 km 完歩という長い期間の活動だが、活動の中でケンカは起きるのか？ 起きた場合は止めるか。それとも見守るのか。
- A ケンカはよくある。ある程度は見守って、子どもたちが自分たちで解決するようにしている。危険だと思えばすぐに止める。
- Q 子どもだけでなく、大人も長期の宿泊活動になればなるほどケンカやトラブルが起きると思う。学生ボランティア同士のトラブルはないのか。
- A 日を重ねるごとに疲れが出て、トラブルは起きやすい。しかし、子どもたちが目の前にいるのでケンカする姿は見せないようにしている。
- Q たくさんの学生ボランティアが参加している。学生ボランティアはどの規模で募集しているのか。
- A 学生ボランティアは 2 年続きに活動をすることが条件にしている。過去に参加した学生の口コミから新たな学生ボランティアが参加することがほとんど。現在は県内 9 大学から約 60 名の学生ボランティアが来ている。
- Q 100km 歩くという過酷な行事はなかなか続かないと思う。それが 15 回も続いているのは素晴らしいことである。どのようにして参加者を募集しているのか。
- A 過去最大の参加者は 120 名いた。今年度は 64 名の参加だった。尾道市内の小学校全てにチラシを配る。過去に参加した兄・姉の影響や保護者間の口コミで参加する児童が多い。
- Q 5 日間という長い期間ということもあって、子どもだけでなく保護者も不安を感じると思う。保護者とのかわり方はどのようにしているのか。
- A 事前に 2 回の保護者説明会を行っている。そこで、この事業は家庭からの自立、「親離れ」だけでなく「子離れ」することを目的にしていることを伝えている。そのため、沿道などの応援も断っている。

伊予校区愛護班連絡協議会「地域で子どもを育てる（「南いよミニキッズニア」の取組を通して）」

- Q 自分も参加してみたいと思った。子どもたちの将来の選択肢が増える良い取り組みである。参加者 100 名に対して場所の広さはどうだったか。
- A 参加者 100 名程度がちょうどよかった。場所は小学校と公民館を活用。
- Q さまざまな体験ブースがあるが、この体験はつまらなかったという意見はなかったか。
- A どのブースも偏りなくほぼ同じ数の参加者が参加していたように思う。しかし、一番参加者が少なかったのはおにぎり握る体験コーナー。
- Q 子どもは参加するが、親は協力しないというパターンが多いと思う。今後この事業を継続するためには協力してくれるスタッフが必要だと思う。スタッフの確保はどのように考えているか。
- A この事業は伊予小学校区の子どもたちに限定している。伊予小学校区外の子どもが参加する場合は、その保護者が 2 時間手伝いをするという条件で参加できるようにしようかと考えている。そうすれば、ある程度のスタッフが確保できるのではないだろうか。
- Q 仮想的な職場を学校等の施設にブースを設営するのに苦労したのではないか。
- A ロゲーニングを夏休みに実施。いろいろな場所を回ることができた。職場とまったく同じようには



できないが、そこは企業側も工夫して取り組んでいただいた。

Q 愛護班とはどのようなものか？

A 子ども会みたいなのというもの。PTAの下部組織

Q たくさんのブースを準備するにあたり、費用はどのくらいかかったのか。

A 費用はほとんどかかっていない。お菓子の材料代のみ。ほとんどのものが企業からの提供(苗など)。

松山市生石地区まちづくり協議会教育文化部

「次の世代へ夢をつなぐまちづくり～垣生山での里山教育～」

Q 教育文化部の構成メンバーの中に希望者3名がいた。その方はどんな方がいるのか。

A 立ち上げのときは各団体から派遣されていた。公民館長などの任期が終わった方も継続して協力している。こちらからお願いしたのではなく、自発的に参加してもらっている。

Q はじめて地域の方が参加した人がいた。地域と個人とのつながりを深めるのは大切なことである。この行事でつながりは増えていると思うか。

A 垣生山登山は初めての人が多い。1回登った人は次からは自分で登る人が多い。自分たちはきっかけづくりでいいのではないかと思っている。きっかけをつくることで地域に目を向けたり、地域に愛着をもったりする人が増えていくと思う。

Q まちづくり活動での学校とのかかわりについてはどのようになっているのか。学校の先生には転勤がある。地域と学校の潤滑油的な組織があまりない。まちづくり協議会は潤滑油になっているのか。

A 先生は学校の中だけで手いっぱい。学校を離れたら教育に関わりたくないというのが本音ではないか。学校の先生は転勤があるが、地域の住民はずっといる。そこをどのようにつなげるかが課題。

Q 今後の活動について。

A もちつき大会の活性化。もともとは畑や田んぼがたくさんあった地域。高齢化している人材をまちづくり協議会がサポートできるようにしたい。また、文化部員の中には教員がいるので学校側の意見を聞くことができる。学校のニーズにこたえた人材を紹介するなどできたらよい。



# 分散会 14

司会者 北岡 康平  
記録者 稲田 めぐみ  
会場責任者 平岡 剛

## 兵庫県 水上夢倶楽部 ～みずかみゆめくらぶ～

水上小学校 PTA と、地域の皆様と、学生団体の協力そして、姫路市との共同の軌跡。「地域が子どもを育てる。子どもは地域をつなぐ。」と掲げ、みずかみの子どもたちに夢を持って欲しかったので、校区の名前「水上」と「夢」を入れている。

〈特徴的な取組〉

- ・伊賀流水上忍者道場 2013
- ・みずかみキャンプ
- ・アート de ぱん
- ・みずかみキャンドルナイト
- ・みずかみフレンズ

大人がなりきり、真剣になることで、子どもたちが楽しみ、興味を持って取り組める活動を展開している。



大崎 哲生氏

## 佐礼谷教育後援会・伊予市立佐礼谷小学校

伊予市立佐礼谷小学校校区の佐礼谷教育後援会は、保護者と教師だけでなく校区のすべての住民が会員として会費を納め、学校の教育活動を支援する教育団体である。学校の教育活動を支援し参画することによって、地域のスポーツ・文化・交流活動の振興を推進している。

先人の熱意と努力で昭和 25 年に設立されて以来、佐礼谷校区では「ふるさとに生きる子どもを育てる」理念のもと、学校、保護者、地域住民がまさしく総がかりで、子どもを中心に据えた教育振興に取り組んでおり、よく学び元気で明るい子どもが育っている。



山中 正和氏 宮本 弘也氏

## 放課後子ども教室「生石子どもいきいき教室」

生石校区を拠点に活動を行っているグランドゴルフのグループメンバーが指導員となり、工作教室に申し込みがあった約 70 名の児童に木工を中心とした工作を行っている。

道具の使い方を徹底的に教えてから作品作りに取り掛かり、安全に配慮しながら行っている。

〈これまでに作った作品〉

- ・木製のちりとり
- ・状差し
- ・船
- ・クリスマスツリー
- ・松かさと竹で作った鶴
- ・爪楊枝の花入れ
- ・写真立て
- ・竹製のトンボ
- ・小物入れ
- ・年賀状ケース 等々

これらの作品は、地区の文化祭に出品し、広く地域の方々に見ていただいている。



和田 善光氏 中村 良孝氏 広田 富男氏  
栗原 葉子氏 三村由美子氏

## 質疑応答、感想

### 兵庫県 水上夢倶楽部 ～みずかみゆめくらぶ～

Q 1 活動の母体となるものは、何か？

→ おやじ教室、学校の PTA 活動から独立したもの。学校は一つの小学校を中心として活動し、いろいろなところに出張している。学校の OB が多い。資金は、兵庫県と姫路市から助成金をいただいている。その都度、参加費（100 円～500 円）を集める。

Q 2 運営リーダーをどう引き継いでいるのか。「新メンバー」はどう加わるのか？

→ 今後はどうなるか分からないが、自分の仲間や友達、現役の保護者に声掛け、繋がりを広げているところ。

Q 3 参加する子どもは、保険に入るのか？

→ 危ない活動は、一日保険に入るようにしている。忍者体験等、いろいろな活動があるが、安全面の配慮を十分に行い、危険を教えることで、今まで怪我はない。

Q 4 なぜ体育館でのキャンプなのか？体育館にテントを張るのはなぜ？

→ 体育館だと、雨天等の心配もなく、安全面も安心。テントは、子どもたちが「張りたい、やりたい！」と言ったから実施している。準備は大変だけれど、「～してはいけません。」は、言いたくない。自由でいい。

Q 5 学校の顔が見えない。学校との関わりは？

→ どの活動も、校長先生の承諾がないと実施できない。活動当初は、キャンプを行う前例がなかった為、防災訓練を連合自治会と一緒にやる事から始め、現在では、先生方の参加もあり、活動の成果内容を理解してもらっている。

Q 6 活動に参加したい子がいっぱいいるのでは？

→ 希望者も多い。定員は 200 人まで。危なくない程度の人数で実施している。人数が増加すると安全面が心配であるが、父親（協力者）の参加を増やすことによって盛り上げていくことを大切にしている。

Q 7 卒業した後の子どもたちの関わりは？

→ 少ないけど、何人かは手伝ってくれたり、声を掛けたりしてくれる。あと一頑張り活動を続けて、参加していた子どもたちが、大人になって活動に戻って来ることを期待している。中学生になると地域での活動が薄くなるが、みずかみキャンドルナイトなど新しいお祭りや、よさこい等、活動を共有することで繋がりを大切にしていきたい。

### 佐礼谷教育後援会・伊予市立佐礼谷小学校

Q 1 朝マラソンの実施の仕方は？

→ 希望者でなく、全員が行っている。土日月以外は毎日実施。学校の日課となり、地域の人と一緒に走ることもある。

Q 2 今までの引継ぎ資料はあるか？どういう風に引き継がれてきたか？

→ 特に、資料があるわけではないが、先生より地域の方が主導で行い、進んで実施されているので、問題なく引き継がれている。

Q 3 PTA 会費はどうなっているのか？

→ 少なくとも昭和 40 年には、全地域、家庭が払ってくれるようになっていた。住民の全戸、600 円×3 回。自分の子どもだけでなく、地域の子どもをみんなで育てたいという思いから始まった。

Q 4 活動を PR していますか？

→ しているが、なかなか人が戻って来ないのが現状。過疎化、少子化が進んでいる。

Q 5 子どもたちまたは卒業生のふるさとへの思いはどうか？

→ 私（佐礼谷小卒業）自身も、佐礼谷が大好きである。教頭として帰って来られて嬉しかった。地域の災害復興支援で、手伝いに来てくれる卒業生もいることは、教育後援会活動の成果と考える。

Q 6 20年ほど前に佐礼谷中学校が統合されたことについて、どう考えているか？

→ 初めは馴染むのが大変だったようだが、今は、大きな課題はあまりないと思っている。中山小と交流学習の機会を増やしたり、スポ少のバレーでいっしょに活動したりと小学校の時から交流を深めている。子どもたちは中山、佐礼谷という意識はなく、同じ中山町の友達として違和感なく学校生活を送っているのではないかと思う。

## 放課後子ども教室「生石子どもいきいき教室」

Q 1 子どもたちの意欲や興味を飽きさせないような工夫はあるか？

→ とにかく褒める。「～したらどうかな？」「どうしたら～になるかな？」と声掛けをすることで、思考し、工夫しようとする態度や知恵、考える力を育てたい。子どもたちが、進歩していると感ずることができる言葉がけを工夫している。



Q 2 曜日によって活動が決まっているのか？

→ 活動内容は決まっているが、子どもたちは好きな曜日（教室）を選んで参加したの  
でよい。登録人数より、実際に来る人数は少ない。人数制限をする時もある。

感想 みんなで協力して大作に挑戦するのも楽しそうだと思う。例えば、図書室や教室の大きい本棚、学校の飼育小屋を作ったり、巨大流しそうめんを作って大会を開いたり等。

Q 3 子どもたちとの活動を通して、感じる喜びとは？

→ 全て！「おいちゃん、ありがとう。」と、歓声が上がると嬉しい。子どもたちの嬉し  
そうな顔を見た時、活動へのやりがいを感じる。自分で作った木工ちりとりで掃除を  
するようになったというお礼の手紙をもらったことがある。

感想 基本的なことを教えておいて、工夫やアイデアを出させる指導がされており、教員が  
学ぶべき、厳しいメリハリのある指導が素晴らしい。

感想 発表者の方々の子どもたちとの活動を話されている顔がとても笑顔で、温かい。

## 最後に

学習指導要領の生きる力を育むためには、子どもたちの体験、経験値を高めていくことが必要である。そのために、子どもたちの活躍できる場や出番、居場所を作り、環境を整えていくことが、大人の責任である。その中で、工夫やアイデアを出し、安全性の確保をしていくことで、大人も成長していく。これこそ、生涯学習。また、大人が楽しむことを根本に、子どもたちと共に遊び、一緒に活動することで、子どもたちからたくさんの力や感動をもらっている。3グループの発表から、多くの学びと気づきを得ることができ、充実した研修会となった。

# 分散会 15

司会者 小田 眞  
記録者 西村 隆信  
会場責任者 土手 康之

## 奈良県奈良市立富雄中学校区地域教育協議会(奈良県奈良市)

### 「富より団子」の誕生からさらに発展する学校地域連携活動

地域と中学校をつなぐために、地域コーディネーターが入り、学校支援が始まって10年が経った。中学生と共に地域資源を活用して、商品開発を行い、「富より団子」を誕生させた。この活動をきっかけにして、翌年からボランティア部ができ、様々な活動に取り組んでいる。ボランティア部は、地域コーディネーターが顧問を務めており、他の部活動と掛け持ちが可能になっている。ボランティア部の主な活動は、環境整備、エコ石けんづくり、しめ縄づくり、夏祭りの販売活動、古代米づくりである。積極的に地域活動に参加して、中学校と地域とをつないでいく役目を果たしている。



新谷 明美 氏

## 中山わんぱく塾（愛媛県伊予市）

### 地域に受け継がれる子どもの健全育成

地域で子どもたちを育てようとの目的で平成16年度からスタートした「中山わんぱく塾」。地域のコーディネーターやスタッフと公民館が連携を図り、地域の自然や人材を活用して、子どもの教育活動や季節に応じた活動をしている。異学年交流による様々な活動を通して、自然・伝統文化を見直したり、リーダー性、社会性を高めたりすることができた一方で、過疎化による参加者の減少、指導者の確保や育成、活動のマンネリ化等が問題となってきている。活動の充実、継続をしていくために、放課後児童クラブとの活動の一本化を模索している。



仙波 久志 氏 (左)  
鶴岡 憲雄 氏 (右)

## ポップ苑（愛媛県松山市）

### ポップ苑活動紹介

障がい者の行き場が無かった時代(昭和57年)に立ち上げ、現在の施設は、平成11年に設立した。ポップ苑は、生活介護事業と就労継続支援事業B型に取り組んでおり、主な活動には、ひよこせんべい作り、箱折りの作業等がある。設立以来、「障がい」を理解していただくために、スポーツ大会への参加、地域のお祭りへの参加、ポップ苑夏祭りでの交流、中学校職場体験、小学4年生との交流会などを行ってきた。日本には、障がい者が800万人おり、国民の16人に1人が何らかの障がいをもっている。発達障がいを含めるとさらにその数は多くなる。これからも、交流を続けることで、「障がい」への理解を深めていきたい。そして、地域に埋もれてしまっている障がい者に手をさしのべていきたい。



渡邊 大吾 氏

## 質疑応答

奈良県奈良市立富雄中学校区地域教育協議会

Q1 コーディネーターとしての仕事をし、活動する中で、企業の方とかかわっていたが、その方々への謝金はどのようにしているのか？

→初年度は、文部科学省の「学区ブランド産品開発」プログラムの一環として取り組んでいたもので、そこから謝金を出していたが、2年目からの企業の方や和菓子職人の方等の講師の方には、全て無償でやっていただいている。ただ、「富より団子」の販売を通して、少しの利益が出るので、それを回転資金として色々な取組を行っている。

Q2 現在、生徒はこの「富より団子」にどのようにかかわっているのか？

→「富より団子」を作ったのは事業初年度の生徒で、2年目からの生徒は、この団子の活用を考えている。給食にも採用していただいているが、その時の市長へのプレゼンを行ったり、栄養面等を考慮して、大きさなどの改善を行ったりもした。

Q3 「富より団子」の値段はいくらか？

→6個入りで450円（冷凍）だが、お祭り等で販売するときは、生徒が油で揚げるなどして、1個100円で販売している。

Q4 ボランティア部は何名で活動しているのか？

→現在、25名程度で、その中の5名が男子。

Q5 総合コーディネーターの仕事はどのようなもので、どのような苦労があるのか？

→地域と学校をつなぐことが役目だと思っている。また、コーディネーター同士を繋ぐために、会議を行い、意見を集約する過程で苦労することがある。

Q6 稲作等での裏方の仕事、例えば、代かきの仕事は誰が行っているのか？

→学校の田んぼの仕事は、地域のボランティアの方に行ってもらっている。地域のボランティアの方は、朝来られて、田の様子を見て、教頭先生と話をし帰る。それらは、全て無償で行ってもらっている。そういった気持ちよく学校に来ていただいて、気持ちよく働いてくださる方を増やして、つなぎ止めておくことが、コーディネーターの大切な仕事の一つだと考える。

Q7 ボランティアやコーディネーターに大学生を取り入れているのか？

→放課後に、テストのやり直しをしたり、学習が遅れている子どもに対しての学習支援を行ったりしている。そこに入ってもらえる学生を大学のボランティアセンターと通じて、募集している。学習支援は、無償で行っており、大学生に対しての謝金は全く出していない。しかし、ボランティア協力証明書を発行しており、それをどのような形で使用してもらってもよいと伝えてある。

Q8 学習支援の大学生は、教育学部の学生か？

→どのような学生でも構わない。「数学が苦手なんですけど大丈夫か。」と言われることもあるが、生徒に教えるというよりも、寄り添い、生徒と一緒に頑張ってくれる学生を探していると伝えている。

中山わんぱく塾（愛媛県伊予市）

Q1 小学校の人数は何人ですか？

→現在 61 人。中山町が伊予市と合併してから、旧伊予市内に若者がどんどん流出しており、児童

数が減少し続けている。

Q2 わんぱく塾の活動を中山小の子どもに限っているのは、なぜか？

→主に放課後に活動しているので、他の地域から来ることが難しい。

Q3 地域のコーディネーターはどのように発掘しているのか？

→事務局の個人的なつながりで発掘している。

Q4 指導者はどのような方がおられるのか。また、若い人たちもいるのか。

→指導者は、60、70代の方が中心で、若者はいない。放課後に活動している事もあり、仕事との兼ね合いが難しい。

Q5 中山わんぱく塾と佐礼谷わんぱく塾との交流はあるのか。

→最後の移動体験学習で、バス研修を行っているが、その時に交流をしている。

Q6 中学生の中には、わんぱく塾の卒業生もいると思うが、その子達との連携、協力はあるのか。

→基本的に、放課後に活動しているので、部活動との時間が重なっていて難しい。佐礼谷わんぱく塾で地域の活動に参加するときには、中学生にも協力していただいている。

ポッポ苑（愛媛県松山市）

Q1 大学の授業で、1週間、介護施設に行くこともあったが、なかなか

自分のする事に対して理解されないことも多く、かかわり方が難しかった。ポッポ苑も地域と多く関わっているが、その際の課題は？

→目に見える障がいであれば、地域の方もかかわり方が分かりやすいが、気付かれにくい精神障がい、知的障がいはどうかかわったらいいのか分からないのが難しい。そして、コミュニケーションをとるまでに時間がかかる。学校教育の中に国語、算数のように障がいについての教育を組み込んでもらえたらいい。大人になって学びはじめるのではなく、子どもの頃から学んでいってほしい。

Q2 野外体験活動で発達障がいの子もたちが来た場合、どのようにかかわればいいのか。

→構えずに、叱るときは叱る、ほめるときはほめる、といったように自然に接すればいいと思う。しかし、周りの子どもたちが「何で何度言っても分からないんだ」というような差別するような目で見ることがある。私としては、脳に障がいがあるということを説明してあげたいが、今の日本では、それは難しい。保護者も障がいを認めたく無いと言うことがある。

Q3 ポッポ苑のような施設は県内にどのくらいあるのか？

→県内に500近くはあると思う。法律に合わせて施設が増えているので、営利目的の施設が多いがポッポ苑は当初の理念を大切にしている。

Q4 ポッポ苑では、どのようなトラブルがあるのか？

→てんかんをもつ方がいると、いきなり倒れたり、相性が合わない人たちが一緒に活動をすると、パニックやたたき合いになったりする。色々なトラブルがあり、体を張って止めることもある。

Q5 ポッポ苑を利用されている方の年齢層は？

→18歳から65歳まで幅広い方が利用している。65歳を越えると、基本的に介護保険に切り替わるので、そこまでしか利用できない。65歳までポッポ苑で作業などをしていた方が、翌日より高齢者のデイサービスを利用するようになるのに違和感がある。

